

論壇

同じ問題でも見方に違い

スペインの地中海沿岸の都市マラガで行われた日本スペインの会議に参加してきた。この会合は今年で19回目になり、昨年は静岡市で開催された。私の静岡高校の先輩である住友生命の元社長の横山氏が、この会合の日本側の議長を務めていらつしやり、その縁もあって昨年の静岡市の会合に続けて、今年も参加させていたが、マラガ市内に入ると、街のいたるところに日本とスペインの国旗が掲げてあり、地元の熱烈歓迎ぶりが伝わってくる。会議にはマラ

元重 伊藤 (国際経済学) 学習院大教授

地域密着の日本スペイン会議

ガ市長が最初から最後まで参加し、会議後の視察では情報技術の先端施設やマラガ生まれの画家ピカソの美術館などを訪問した。会議で何かを交渉したり決めたりするわけではない。双方の企業や政府や大学の関係者が集まり、あらかじめ決められたテーマで議論するのだ。今年ではグローバル化と保護主義の問題や、高度情報技術社会への対応などのテーマで話し合ったが、同じ問題でも日本とスペインの見方に違いがあることが印象的だった。こうした違いが明確になるからこそ、国際的な会議が有益であるのだ。

ところで、この会合について興味深い話を聞いた。2011年のことだ。この年の秋には仙台市でこの会合が開かれる予定であったという。ところが、その年の3月11日に東日本大震災が起きた。福島原発事故が起きた。東北地方はもちろん、日本全体が大変な混乱にあった。国によっては、大使が原発事故の影響を恐れて国に逃げ帰ったところもあったという。そうした中で、日本側の事務局はスペインに会議の延期を申し入れた。混乱と放射能の風評で、スペイン側も会議に参加するのが難しいと考えたのだろう。ところが、スペインの側からは、こうした時期だからこそ会議を開くことが重要である。そして仙台の近くの石巻辺りの被災地に慰問に行きたいという返事が返ってきたという。ここまですべてもあって、日本側に断る理由はない。結局、仙台での会合は予定通りに行われ、石巻への訪問も実現した。大震災の直後の仙台会議だからこそ、日本とスペインの関係についてより踏み込んで議論をする良い機会であったということだ。

さまざまレベルで接触

2国間の良好な関係は一朝一夕に確立するものではない。政府の交渉だけで実現するものでもない。産業界、学会、市民社会、地域など、さまざまなレベルで接触が繰り返されることで、より緊密な関係が醸成されるものだ。昨年の静岡の会合では、結果的に時期はズレてしまったが、スペインの国王と日本の天皇の訪問を実現した。会議も盛況であった。そして今年のマラガの会議も、静岡のそれに負けないような盛り上がりであった。こうした会議が地域で行われることで、地域社会のより積極的な参加を促すことになる。2国間関係は国家レベルだけでなく進めるものではない。地域に密着した取り組みが必要である。その意味でも、日本とスペインのこの会合が日本とスペインのいろいろな地域の開催で続けられていくことを願っている。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。